

「シアン」

作…棚瀬美幸

登場人物…女1 ジェニーと呼ばれているらしい

女2 ヘレンと呼ばれているらしい

女3 エレンと呼ばれているらしい

男1 シルヴェスターと呼ばれているらしい

男2 サミュエルと呼ばれているらしい

エリザベスと名付けられた女

メアリーと名付けられた女

ロバートと名付けられた男

SCENE・1

入り口も出口もない”ある場所“に訪れた三人の女。その”ある場所“には、扉がないだけではなく、浸透していくことで中に入ったり、いつの間にか外にいたということもありうるような空間である。いわば、空気の膜に覆われた空間。それはどこかの誰かの思想の中のものでもある。

女1 すみません。

女2 すみません。

女3 すみません。

女1 ここでいいでしょうか？

女2 ここでいいでしょうか？

女3 ここでいいでしょうか？

動くことのなかった男二人が、体勢を少しずつ変えだす。女たちの声に合わせて。

男1 誰だ？

男2 誰だ？

女たちに、中にいる男の声は届いていないようだ。

女1 入ってもいいですか？

女2 入ってもいいですか？

女3 入ってもいいですか？

男1 聞いているぞ。

男2 聞いているぞ。

女1 すみません。

女2 すみません。

女3 すみません。

男1 謝っている。

男2 謝っている。

女1 入ってもいいでしょうか？

女2 入ってもいいでしょうか？
女3 入ってもいいでしょうか？
男1 どうする？
男2 どうする？
女1 すみません。
女2 すみません。
女3 すみません。

恐る恐る中に身を滑り込ませる女3人。

男1 謝りながら入ってきた。
男2 謝りながら入ってきた。

しかし、女たちの身体は完全には入りきってはいない。いわば中空にただよう場にいる。

女1 お邪魔します。
女2 お邪魔します。
女3 お邪魔します。

中とも外ともつかない場を見渡す三人の女。

男1 お邪魔されるようだ。
男2 お邪魔されるようだ。
女1 誰かいませんか？
女2 誰かいませんか？
女3 誰かいませんか？

更に中心へと、もう一つの膜を潜り抜けようとする女たち。

男1 お邪魔されたみたいだ。
男2 お邪魔されたみたいだ。

完全に膜を背にする女たち。

女1 あのうち、
女2 あのうち、
女3 あのうち、
男1 誰ですか？
女1 2・3 え・・・？
男1 2 お邪魔したのは誰ですか？
女1 2・3 ・・・すみません。
男1 2 今謝ったのですか？ それとも謝っているわけではないのですか？
女1 2・3 ・・・すみません。
男1 2 今謝ったのは誰ですか？
女1 2・3 すみません。
男1 2 今謝ったのは、
女1 2・3 今謝ったのは、
女1 2・3 （間髪いれずに）すみません。
男1 2 誰ですか？

女1・2・3・・・ここに来たらいいと言われたんです。
 男1・2　そうですか。
 女1・2・3　ええ、はい。
 男1・2　ご予約はされましたか？
 女1・2・3　予約ですか？
 男1・2　予約をされた方ではないと、お断りしております。
 女1・2・3　はい、電話をしました。いったったか忘れてしまいましたが、ここを勧められてそれから数日後、いえ、数週間後だったと思います。もしかしたら数ヶ月経っていたかもしれない。
 男1・2　そうですか。それでは、知らされた言葉を教えてください。
 女1・2・3　暗号ですか？
 男1・2　暗号ではありません。言葉です。
 女1・2・3　すみません。
 男1・2　すみませんではありません。言葉です。こちらが伝えた言葉です。それを教えてください。
 女1・2・3　「あなたがたは？」
 男1・2　「ぼくらは兄弟である二兄弟。」
 女1・2・3　「私たちは姉妹ではない三人姉妹です。」
 男1・2　「姉妹ではないのですか？」
 女1・2・3　「三人姉妹ですが姉妹ではありません。一人です。」
 男1・2　「ようこそ、三人姉妹。」
 女1・2・3　「ありがとう、二兄弟。」
 男1・2　では、どうぞ。数日前か数週間前か数ヶ月前に言われた、もしかしたら数年前に言われたかもしれない言葉のようにしてください。
 女1・2・3　その時の言葉通りにですね？
 男1・2　そうです。
 女1・2・3　わかりました。

女三人は、舞台中央に立つ。
 鐘が鳴る。どこからの鐘か？　おそらくスグ近くに教会か何かがあるのだろう。

女1・2・3　無意味な音の連続　そうね　音が重なって言葉　けど　言葉は何も伝えない　それでも　信じていた　だって　それだけしかない　どこにもない　ここにはいない　どこかにはと信じたかった　思いが重い　沈殿していたことさえ気づかず　行き先を失った破片　ギザギザに　分断されて　ザクザクと　細切れになつて　散り散りに飛び交う　落し物　消えた音と形になることもなかったミヤア指の隙間から零れ落ちて　血を滴らせた私の手だけ　ここに　動くのをやめました
 静止　制止　生死　精子　動かず　抑えて　あなたに捧げた　欲情はもうない
 はずなの　卵　爛々と

SCENE・2

エリザベスと名付けられた女と、メアリーと名付けられた女、そしてロバートと名付けられた男がやって来る。
 メアリーが、持ってきた椅子に座る。エリザベスは、自分の椅子をメアリーの椅子の向かいに置き、ロバートが持ってきた椅子の後ろにロバートと一緒に立つ。

メアリー どうして出て行つたの？ どこにも行かないって言ったじゃない。ねえ、あれは嘘だったの？ 嘘ついたの？ 嘘でも言わないと私が納得しないと思って嘘ついたの？

メアリー、向かいに置かれたもう一つの椅子に座る。

メアリー（自身の母であるかのように） 違う、そうじゃないのよ。嘘なんかじゃないわ。そうじゃなくてね、

メアリー、元の椅子に戻る。以後、二つの椅子（メアリー本人の椅子と、母の椅子）に交互に座る。

メアリー そうじゃなくて、何？ 現に出て行つたじゃない。こそっと自分の荷物だけまとめて、最初から出て行くつもりだったんでしょ？ 夜中、あの日の夜、足音を立てないように階段を下りて、あの暗い廊下を通って、お気に入りの靴を履いて、振り返ることもなく出て行つたんでしょ？

メアリー（母） だから違うの。悩んでいたのは事実よ。だけど、嘘をついたわけじゃない。あなたと話していたときは、このままでいようと思ったの。あなたのためにもここにいた方がいいって。

メアリー 残されたこっちの身にもなつてよ。あれから私たちがどれだけ待ったと思ってるの？ ずっと待ってたのよ。いつか、きっと、必ず、絶対帰って来てくれるはずだって。だって、そうでしょう？

メアリー（母） ごめんね。

メアリー 今になって謝るくらいなら、あの時帰ってきてくれたら良かったのに。私たちのことなんて想像したこともないでしょう。

メアリー（母） 忘れたことなんかなかったわ、一度も。本当よ、忘れたことなんて。

メアリー 待たせてる身は優雅なもんよね。好きなきにだけ私たちのことを思い出して感傷に浸ってたんでしょ。私はなんて罪深い女なんだって。そう思って被害者意識に浸って、ある意味楽しんでいたんでしょ。あなたが憎い。すごく憎い。

ロバート おい。

エリザベス どうしよう。

ロバート おい。

エリザベス メアリー？

メアリー 永遠に許すことはないから。

エリザベス メアリー、駄目。

メアリー 許さない。絶対に許さない。

ロバート 終わりだよ、もう終わりにしよう。

メアリー（母）（笑） そう言うと思ったわ。

ロバート やめろって。

メアリー（母） こんな言葉知ってる？ 追いかけたものが負けなのよ。待ったものが負けなのよ。

エリザベス そんなこと言ったら駄目。

メアリー（母） 待たなければ良かったの。

ロバート やめろって言うてるだろ。

元の自分の椅子に戻って泣き出すメアリー。

エリザベス　メアリー、大丈夫？

ロバート　大丈夫、大丈夫だから、落ち着くんだ。

エリザベス　ゆっくり深呼吸して。大きくゆつたりと。そうよそう、深呼吸するの、もう一度。

女1・2・3　いなくなった朝の食卓を私は忘れることがない。ポツンと空いた椅子。浮いた空間。重力の比重がバランスを崩し、私は椅子から落ちないようにしがみついていた。噛み付いていたこの世界に。歯が悲鳴をあげて欠けた。言葉は生まれない。表情はいつも通りに。欠けるってこういうことだったのね。

椅子が三脚、女1・2・3の前に置かれる。

ロバートは、三人の女に向かって立っている。

メアリーとエリザベスは、ロバートの中の姉として椅子を動かしていく。

ロバート　嫌だよ、嫌だって言ってるだろ。こんな服着れるわけないよ。姉さんたち、俺のこと着せ替え人形みたいに思ってるだろう。．．．　なんでだよ？　なんで駄目なんだよ。普通は俺だよ。ワタシなんて言ってる奴いないもん。そんなこと言ったら馬鹿にされるよ．．．ただでさえ女みたいだって笑われてるんだよ。姉さんたちのせいだからね．．．だから嫌だって言ってるだろ。なんで姉さんたちが選ぶんだよ。着るのは俺なんだよ．．．だから俺でいいだろ．．．この服だって全部姉さんたちが選んだ服じゃないか。なんでこんな女みたいな服着なきゃいけないの？　俺は姉さんたちのおもちやじゃないんだよ。だからいつまでたっても彼氏ができないんだ。理想の男ばかり求めて。俺で遊んで。姉さんたちが求めているのは、女の腐った奴だ。俺はそんな奴になんかなるのとは絶対ごめんだから。俺は俺なんだよ。

女1・2・3　ないない、ないの。自分の好みなんてない。ないのよ。好きな色や好きなデザインもない。好きなものなんてない、ないの。着たいワンピースもなければしたい髪型もない。ないの。なんでもいいの、なんでもなんでもなんでも。だって私が欲しいのは私の近くにいるくれる人だけ。だってだから、だからだって、だってだから、だからだから。

エリザベス、椅子の一つに座る。

別の二つの椅子からエリザベスを見上げるロバートとメアリー。

エリザベス　ねえ、私と何したいの？　はっきり言ってよ。何？　ねえ何？　何でも言って。たぶん答えてあげられると思うよ。どうしたの？　恥ずかしいの？　恥ずかしいこと？　いいよ。何でもしてあげる。私のこと好きなんでしょ？　好きだって言ってくれたら、どんなことでも付き合ってあげる。

別の椅子に座るエリザベス。

エリザベス　別に。これといって約束なんかしてない。何もしてない。駄目？　何かしてなきゃ。ただ座ってたいの。椅子になった気持ちでここにいるの。私、椅子になりたいの。物になりたいの。

エリザベスは、もう一つの椅子に座る。

エリザベス　そんな目で見ないで。そんな気なんてないから。これぼっちもないの。やめて、やめてってば。だからそんな女じゃないって言ってるでしょ。ちよつと触らないでよ。触らないでって言うてるでしょ。汚らしい。汚いのよ、あんたは。泥だらけの靴、よれよれの服、ぼさ

ぼさの髪、臭い息。最低。サイテーサイテーサイテー。

椅子は三脚とも、エリザベスによつて倒されている。

女1・2・3 あなたはあなた。彼は彼。彼女は彼女。そして私は。違います、それは違います。あなたはあなた。いいえ、そうではありません。そうではありませんでした。彼は彼。間違っている。間違っています。彼女は彼女。おかしい。おかしいです。そして私は。違います。全然違います。ちっとも正しくありません。正しくなんかいいです。間違っています。おかしいです。だから違うんです。だけど違うんです。違うと言っていないくても違うのです。違うということです。違うのです。そうではないのです。そうではありません。嘘なんです。

SCENE・3

男1・2が戻ってくる。

男1 お待たせしました。

男2 寒くはなかったですか？

女1 いいえ。

男1 そうですか。

男2 そう感じる人が多いんですよ、夏に来られる人の場合は特に。

男1 ここは一定の温度になるように調整されています。人が一番快適に感じるように設定されているんですが、暑い外から来られた方や、体温が上昇している状態でここに来られた方は、寒いと感じられるようです。

女2 大丈夫です。寒くはありません。

男2 そうなんですか？

男1 さっき寒かったと言われたでしょう？

女3 え？

男2 どちらです？

男1 寒くはなかったのですか？

女1 はい。

男2 では、暑くもなかったですか？

女2 はい。

男1 そうでしたか。

女3 すみません。

男2 なぜ謝るのです？

女1 いえ、どちらともつかない返事をしてしまって、お二人を混乱させたのかと、

男1 混乱はさせられていませんよ。

男2 混乱しているのはそちらです。

女2 そうかもしれません。

男1 寒さや暑さは主観的なものです。ですから、じっくり考えてみると暑いかな、寒いかなのです。

男2 暑くも寒くもないというのは、ありません。

男1 私はずっと寒いと思っていました。今でもやはりかすかに寒気を感じます。

男2 私には暑いんです。もって温度を下げてほしいくらいです。しかしそれはできません。

男1 そうです。できないのです。これが一番平均的に暑いとも寒いとも感じられる温度だからなのです。

女3 あとう、
 男2 どうしました？
 女1 聞いてもよろしいでしょうか？
 男1 なんですか？
 女2 いつからここに？
 男2 いつから？
 女3 その前はどちらにいらっしゃったんですか？
 男1 ここではない場所のことですね。
 女1 どうしてここに？
 男2 気になりますか？
 女2 はい。
 男1 ここで生活しています。ここで暮らしているのは、僕たち二人だけです。他の人はここに
 住んでいるわけではありません。セミナーが開催され時には、大勢の人がここを訪れます。し
 かし、今日のような日は、滅多に人は訪ねてきません。
 男2 こういうことです。
 女3 こういうことですか？
 男2 気になっているんでしょう？ ここがどういう場所なのか。
 女1 こもですが、
 男1 そういうことです。他にも何か？
 女1 あなたは、
 男1 え？
 女2 あなたはいつから、こちらにいらっしゃるのですか？
 男1 いつからですか？ いつからでしょう。あなたがここを知ったのが何年か前のように、私
 がここに来たのも何年も前です、きっと。
 女3 ・・・何年も前、
 男2 それ以上のことはお答えできません。ここでは属性を捨てなければならないのです。
 ここでは、ゼロの地点に立つことを目的としています。「今ここに相手がいることを受け入れ、
 行為そのままを見つめることが大切だからです。これまでどこにいたか、何をしてきたか、ど
 んな職業についているか、年齢はいくつか、名前は何か、そんなことは全てここではどうでも
 いいのです。そしてそんなことはどれも必要がないのです。ここで時間と向かい合うためには、
 邪魔なものとなります。だからここでは外の世界での名前も使いません。戸籍上の名前などい
 らないのです。あなたの名前も決まっています。
 女1 ジェニー
 女2 ヘレン
 女3 エレン
 男1 そうです。それがここでのあなたたちの呼び名です。そして、僕はシルヴェスター。弟は
 サミュエルです。
 男2 僕はサミュエル、兄はシルヴェスターです。
 女1 なぜ、属性を捨てるのですか？
 男1 喩え話をします。
 女2 はい。
 男1 ある女性が車で職場に向かっていきます。出勤時間に間に合わせようと焦っています。そこ
 に横から飛び出してきた老人がいました。スーパ―の袋を抱えたおじさんです。運転をして
 いた女性は、飛び出してきた老人を轢いてしまいました。老人は即死でした。女性は急いで警
 察に行きました。しかし、その女性はその日のうちに警察から出て、家に帰ることができまし
 た。そしてそのまま普通の日常を送りました。さて何故その女性は拘束されることもなく、い
 つも通りに生活することができたのでしょうか？
 女3 え？
 男2 わかりますか？
 女1 なぞかけですか？

男2 答えてください。

女2 老人が助かったからですか？

男1 老人はその場で亡くなりました。

女3 じゃあ、人間ではなかったから。

男1 人間ではない？

女1 最初から死んでいたんです。もしかしたら運転していた女性の父親だったのかもしれない。

男1 昔に死んでいる父親。

女2 それではなぞかけになりませんね。

男2 そうですね。

男2 では、もう一つ別の質問をします。

女3 続きですか？

男1 いえ、別の喩え話です。

女1 はい。

男2 ある日曜日、男の人が自転車後ろに子供を乗せて、ハイキングに出かけようとしています。子供は大喜びではしゃいでいます。道を右折したその時、トラックと正面衝突をしてしまいました。トラックを運転している男性は、自転車に気づくことができなかったのです。自転車に乗っていた男性は助かりませんが、子供は急ぎ救急病院に運ばれました。緊急手術を要する重態です。しかし、手術をしても助かる見込みは低い。救急病院で手術を担当する医師は言いました。「私にはこの子を助けることができない。なぜならこの子は私の子供だからだ」と。では、この医師と子供の関係は？

女2 子供と医師の関係ですか？

男2 そうです。

女3 医者の子供なんですよ？

男2 医師はそう言っています。

女1 なぜ助けることができないのですか？

男1 助けることができないとは、どんな関係だからのですか？

女2 子供の産みの親だからですか？

男2 どういうことですか？

女3 自転車に乗っていたのが育ての親で、医者が産みの親。

男1 子供と血の繋がった父親ということですか？

女1 はい。

男2 他には何か考えられませんか？

女2 医者の子供ですか？

男1 違います。複雑に考えないでいいのです。

女3 え？

男2 自転車を運転していた男性が父親で、医師は母親です。

女1 ああ・・・

男1 救急病院にいた医師を男性であると思ひ込むから、複雑な物語を考えていたのです。

女2 そうです、そうでした。

男2 それが偏見です。偏見は相手の属性を考へることから生まれます。最初のなぞかけもそうです。老人を轢き警察に行った女性は、警察に仕事に行ったのです。事故を報告するために出頭したわけではないのです。

女3 え？

男2 そうです。ひき逃げです。

女1 そんな、

男1 医師を男性だと思う。老人を殺してしまった女性が隠蔽をするわけがない。そういう思い込み、偏見が答えを見えなくさせ、勝手なストーリーを作ること強引な答えを導くのです。

女2 偏見ですか？

男2 はい、偏見です。しかしそれは誰もがどこかで何かについて持っているのです。それに気づき、真実を探るのがここの目的です。

女3 真実を探す場所ということは、聞いていました。
男1 そうですか。自分を中心にした物語を持つてはいけないのです。

女1 少し疲れました。

男2 そうですか。

女2 今日から参加ですよ？

男1 明日から一緒に参加してもらうことになります。ここでは様々な方法で、偏見やトラウマを失くすプログラムを実施しています。全てここの創始者が立案したものです。

女3 その方は心理カウンセラーなのですか？

男1 それも偏見です。

女1 すみません。

男2 プログラムに参加するためにここに来られたんですね？

女2 はい。

男1 では、明日からの参加をお待ちしています。今日は自由にこの施設を見学してください。怪しい団体ではないことを、自分の目で確かめてください。

女3 怪しい団体？

男2 このセミナーのことを悪く言う人もいます。全て偏見です。ここに来られる方の中には、自分でも気づかないうちにどこかで疑いを持っている人もいます。ここは人を拘束するような場所でもなければ、強制的に思想を統一させようとする団体でもありません。それを自分の目で知ってほしいのです。あいにく、今日はセミナー開催時ではないので、僕たち二人以外には、このセミナーの幹部数名しかここにはいません。今日は幹部によるセルフプログラムが行われています。ご希望であればそこを見学することもできます。最初は驚かれるかもしれませんが、しばらく見ていただければそれがただの有効なプログラムか理解していただけるはずです。

女1 今日はまず休ませていただきます。

男1 そうですか。お部屋は突き当たりになります。空いている部屋であれば好きなところをお使いください。使われる部屋が決まりましたら赤い札を出してください。赤い札のない部屋は空き部屋ですので、どこでもかまいません。

女2 わかりました。

男 どうぞごゆっくりお休み下さい。

女3 ありがとうございます。

女三人、歩き出す。

女2 シルヴェスター、さんでしたよね？

女3 サミュエル、さんでしたよね？

女1 お二人はご兄弟なのですか？

男1・2 はい。

女三人、出て行く。

SCENE・4

姉（女1）と弟（ロバート）が、傘を選んでいる。

赤、青、黄、ピンク、紫、オレンジ、緑。色とりどりの傘。

姉 どれがいい？

弟 何個選んでいいの？

姉 何個もほしいの？
 弟 一つだけ？
 姉 そうよ。だって一つしか買うお金ないもの。
 弟 一つだけかあ。
 姉 どれにする？ あなたが選んでいいのよ。
 弟 お姉ちゃんはどうがいい？
 姉 ほらまた、そうやって人に聞く。自分で決めなさい。
 弟 だって、どれも綺麗なんだから。
 姉 もし全部買えたとしてもそんなに持てないでしょう。一番ほしいものにしなさい。
 弟 一番が何個もあったら？
 姉 どれとどれで悩んでるの？
 弟 青と緑と紫。それに赤とピンク。黄色とオレンジも捨てがたいし。
 姉 それじゃあ全部じゃない。
 弟 えっとねえ、えっとねえ。
 姉 できるだけ長く使えるのを選ぶのよ。
 弟 だとしたら、青かオレンジ
 姉 できるだけ雨降りが待ち遠しくなるようなものにしなさい。
 弟 それなら断然、黄色。でも赤もいいな。
 姉 できるだけ自分に合った色ね。
 弟 じゃあ、緑かなあ。それとも紫？ ピンクってことはないよね？
 姉 何？ 私に聞いているの？
 弟 だって、
 姉 自分で選びなさいって言うてるでしょう。私は何色でもいいんだから。どの色も全部好き。
 弟 けど、その中で一つ選ぶとしたら？
 姉 選ぶとしたら？ 赤かな。あなたに似合いそうなもの。
 弟 赤か・・・
 姉 いいのよ、どれでも。あなたが好きなもので。
 弟 うーん・・・そうだね、赤にする。
 姉 長く使える？
 弟 うん、もちろん。
 姉 雨が楽しみ？
 弟 ワクワクする。
 姉 あなたに合った色？
 弟 今の気持ちにぴったり。お姉ちゃんとおでかけ。

一つの赤い傘を二人で差す姉弟。
 女（女２）と男（男２）が傘を差さずにやって来る。

女 すみません。
 姉 はい。
 男 ちよつといいですか？
 弟 なんですか？
 女 その傘なんですが、
 姉 ええ、はい。
 男 傘を譲っていただけませんか？
 弟 え？
 女 昔、子供が持っていた傘とそっくりなんです。
 男 娘の小さい頃の傘もこんな赤い、真っ赤な傘でした。
 男・女 お願ひします。私にくれませんか？
 弟 そんなこと急に言われても・・・ねえ、お姉ちゃん。

姉 なんですか？ そんなに子供のお気に入りの傘だったんですか？
 男 ああ、もう、そうです。その通りです、その通りなんです。
 女 あの子は雨が降っていないなくても、出かけるときには赤い傘を持っていました。雨なんか降らないのに。
 男 娘は、赤い傘を差して出掛けるときには、いつもスキップをしていました。くるくると傘を回しながら。とても器用に。水溜りを飛び越えるときだけは傘を高くあげるのです。
 女 本当に赤い傘が好きだったんだと思います。
 弟 なくなっただんですか？ その赤い傘はなくなっちゃったんですか？
 女 なくなっただけではありません。
 弟 じゃあ、
 女 なくなっただけではないのですが、
 弟 じゃあ、まだあるんでしょう？ それなら僕たちの傘じゃなくても、
 男 今もう手元にはありません。
 弟 どうして？
 女 壊れてしまいました。
 男 飛んでいってしまったんです。娘がジャンプしたその時、手を離し、
 女 赤い傘は更に赤く染まっていました。
 姉 え？
 女 あの子の血です。
 男 娘は傘だけを空高くに投げたのです。風が上手い具合に娘の傘をさらっていきました。水溜りには赤い傘の色が映っていました。
 弟 もしかして、
 男 娘は戻ってきません。あの傘と同様に。
 女 死にました。
 姉 嘘。
 弟 お姉ちゃん、
 男 お願ひします。その傘を私に譲ってください。やっと見つけた娘の形見なんです。
 女 お願ひします。あの子の上にもう一度、この傘を差してあげたいのです。
 男 お礼に他の色の傘を買ってきます。何本でもあるだけさしあげますから。
 女 あなたがたは、絶対にこの赤い傘でないといけないわけではないんでしょう？ 何色でもいいんでしょう？
 男 どの色でも傘は傘です。
 女 私にとっては、赤い傘と他の色の傘は同じではありません。
 男 この傘がいいんです。この真つ赤な傘が。
 弟 どうしよう。
 姉 ……
 弟 お姉ちゃん、お姉ちゃんったら。
 姉 あなたの傘よ。
 女 お願ひです。どうぞ私に譲ってください。
 男 いいえ、是非私に。
 姉 お二人は一緒ではないんですか？
 男 え？
 女 私たちですか？
 姉 だって、同じようにこの傘を、
 男・女 赤の他人です。
 弟 そうなんですか？
 女 この方に譲るぐらいなら、私にください。
 男 なんだって？
 女 私の方があの子を愛していたんです。とてもとても愛していたんです。だって私が産んだ子です。このお腹を痛めて産んだ子なんです。

男 私に譲ってくださるのなら、この女性の倍のお礼をします。何本でも何本でも。あなたがたが望むなら世界中の傘を買ってさしあげます。それぐらいしてでも、この赤い傘一本が欲しいのです。ここで隠しても仕方がないので言っておきますが、私は資産家だ。それぐらいのお礼は充分にできるはずですよ。娘の思い出がつまった傘なのです。私には新品の傘などどうでもいいのです。この傘だけが、

女 この傘だけを探していたのは私も同じですよ。この赤はあの子の血の赤ですよ。そして私の血の赤ですよ。あの子と私の血の色なんです。あなたに、母と娘の絆がわかるわけがありません。男性はいつも無責任なものです。子供を思う母の気持ちに比べたら、男性は全てお金で解決しようとするだけのちっぽけなものです。

男 なんだと？ だから女性はいままでたつても、女 じゃあ、そうじゃないとも言ってますか？

男 血の繋がりは男だって同じだと言っているんだ。女はいつも子供を独占しようとして、自分のもののように扱ってただけじゃないか。

女 なんですって。

姉 わかりました。わかりましたから。やめてください。ねえ、この傘あげていいよね？

弟 お姉ちゃん？

姉 この傘は弟の大切なものだったんです。いえ、厳密に言うとなさなる予定でした。ですが、お二人のどちらかに差し上げます。

女 本当ですか？

男 本当にくださるんですか？

姉 いいよね？

弟 うん。お姉ちゃんがいいなら、僕はいいよ。

女 ありがとうございます。

男 ありがとうございます。

姉 じゃあ、どっちな人へあげて。

弟 え？

姉 あなたの傘よ。二人のどちらへあげるのか決めなさい。

弟 僕が？

姉 だって、私はどっちでもいいんだもん。私の傘じゃないし、この傘に愛着もなければ、思い入れもない。だってどうせどんな傘でも良かったんだから。

弟 そうなの？

姉 傘なんてねえ、雨がしのげればなんだっていいのよ。それに、二人のことも知らないし。

男 私ですよ？

女 いいえ、私ですよ？

男 いいえ、私ですよ？

女 いいえ、私ですよ？

弟 重い。重い。なんて重たい傘だったんだろう。お姉ちゃんと二人で持っていたときはあんなに軽い傘だったのに。お日様よりも重いかもしれない。

男 私に。

女 私に。

弟 お姉ちゃん。

姉 さつさと決めちゃいなさいよ。あなたの傘でしょう。あなたが選んだあなたの大好きな大切な傘なんですよ。

弟 僕の大好きな大切な、傘？

姉 さあ、早くして。こんなところにいたら雨に濡れちゃうでしょう。

弟 僕が決めるの？

姉 だから、あなたの傘よ。

弟、傘をたたむ。女と男の息を呑んで待っている。
赤い傘の先を姉に向ける。

姉 何？

弟 ……ひどいよ。

姉 何なの？ ちょっとやめてよ。

弟は、傘の先端で姉の身体を突く。

弟 「お姉ちゃん」

崩れ落ちる姉。

弟は傘を広げる、高く高く。弟が手放した傘は、どこか空高くに飛んでいった。

SCENE・5

母親（女3とエリザベスが二人で演じる）は掃除でもしているかのように動き回っている。
子供（メアリー）はパズルに夢中。あと一ピースで完成なのに、そのピースが見当たらないようだ。

子供 ねえ、一つ足りない。あと一つなのに。

母親 きちんと探したの？

子供 うん。

母親 どこかにあるでしょう。

子供 だと思っただけで探したけど、ないんだもん。

母親 そんなはずないでしょう。

子供 どっかいっちゃった。どっかいっちゃったんだよ。

母親 いっちゃったじゃないでしょう。勝手にどこかにいくわけがないんだから。

子供 だけじゃないんだもん。

母親 ないじゃなくて、失くしたでしょう。あなたが失くしたから見つからないの。

子供 失くしてなんかないもん。

母親 じゃあ、あるはずじゃない。こっちは忙しいんだから、自分で探さない。

子供 ないよ、ないないないない。

母親 だから、ないじゃないでしょう。自分で失くしたんだから。言葉は正しく使いなさい。誰

かがなくしたわけじゃないでしょう？ それともお母さんがなくしたとも言うの？

子供 そうじゃないけど。

母親 じゃあ、誰がなくしたの？ なくしたのは誰なの？

子供 わかんない。

母親 わかんないじゃないでしょう。

子供 なくしました。

母親 誰が？

子供 私が。

母親 そう。最初からそう言えばいいの。わかった？

子供 はい。

母親 人のせいにするんじゃないよ。物が自分でどこかにいくわけないんだから。
子供 なくしました、私が。だから見つかりません。

母親 そう。
子供 見つからない。
母親 そう。
子供 ねえ、見つからないんだって。
母親 だから何。
子供 見つからないの。
母親 あなたが失くしたんでしょう。だから見つからないんでしょう。
子供 だって、
母親 だったら探さない。
子供 お母さん。
母親 何よ、うるさい子ねえ。
子供 見つからないんだもん。
母親 どこにあるわよ。
子供 無理だよ。もう探したんだもん。
母親 無理なわけじゃないでしょう。
子供 じゃあ、お母さんに何しろっていうの？ お母さんが失くしたわけでもないのに。
子供 探して。
母親 え？
子供 探してよう。
母親 探してくださいでしょう？
子供 探してください。
母親 一緒に探してほしいのなら、そう言えいいじゃない。
子供 一緒に探してください。
母親 どこでなくしたの？
子供 どこか。
母親 どこかってどこ？
子供 ここらへんのどこか。
母親 よく探したの？
子供 うん。
母親 （子供の近くに来て）ほら、どいて。邪魔でしょう。・・・ないわねえ。
子供 でしょう？ ないんだよ。ないの。
母親 ジャンプしてごらん。
子供 え？ こう？

子供がジャンプをする。すると、探していたピースが転がり落ちてくる。

母親 ほら。

子供 あ、

母親 なんでこの子はこのなんだろうねえ。

子供 すごい、すごいよ、お母さん。すぐに見つかった。

母親 いつもあと少しというところで、物を失くしたり失敗するんだから。しっかりしないさいよ。

子供 はい。

母親 本当にわかってるんだろうねえ。

子供 できたよ、できた。これで完成だ。

母親 人の力を借りないと、何一つできないんだから。

母親を見て笑顔になる子供。

子供 「お母さん」

母親は、子供から離れて掃除をしている。
子供が一人でパズルをしている。

子供 ねえ、見て見て。できたよ、できたの。完成したの見て。ねえ、見てつてば。どう？
ごいでしょう？ 全部一人でやったんだよ。これ全部一人でやったんだよ。どう？ どう？ ど
う？ 難しかったんだよ、ここ。けどねけどね、何回かやってたらわかったの。わかったんだ
よ。どう？ すごいでしょう？ ねえ、お母さん、見てつてば。ちゃんと見てよ。
母親 うるさいわねえ。話しかけてこないで。何をいい気になってるのよ。たかがそれくらい
のことを自慢して。

子供 お母さん、お母さん。

母親 ……（無視）

子供 （涙声で）おかあさん。

子供が一人でパズルをしている。母親は掃除。

子供 あと少し、あと少し。あ、もうすぐだ、もうすぐ完成。あつ。あーあ、やっちゃった。お
母さん。グチャグチャになっちゃったよう。あと少しだったのに。

母親 あら、残念ねえ。

子供 お母さん。

母親 ほらほら頑張つてごらん。いつもあなたはどこかで失敗するんだから。あと少ししたらお
母さんが手伝いに行つてあげるから。

子供 うん。

子供はじつとパズルを見ながら、一つのピースを手にとると、まるで意識していないかの
ようにポケットにいれこむ。そして、またパズルを始める。

SCENE・6

女（エリザベス）、男1、男2が3人で社交ダンスを踊っている。
遠巻きからそれを見つめている。あの人（メアリー）”。

女 あの人、絶対に私のことを嫌っている。嫌っているに違いない。私は嫌われている。だつ
て、あんなにも私のことを冷たい目で見るんだもの。私がちよつとも何か発言しようとする
と、何か言いたげにこつちをチラツと見て、私から離れていくの。はつきり口にしないだけで、
私のことが大嫌いなものよ。けど、なんで？ なんで嫌われなきゃいけないの？ 他の人はそん
な目で見てないのに。あの人だけ。あの人を怒らせるようなこともしなければ、傷つけるよ
うなこともしないはずなのに。それとも何か私した？ 何かあの人、私の気に障るようなことし
てる？

男1 そんなことしてないと思うよ。だって、エリザベスは誰にでも優しいじゃない。誰かを最
辱することもないし、みんなに平等に接してると思うよ。嫌われるような理由なんかないと思
うけど。

女 じゃあ、なんてあの人だけ私のことあんな目で見えるんだろう。だって私が何もしてないとし
たらおかしいじゃない？ やっぱり何かしたんじゃないのかなあ。

男2 気にしすぎだよ。思い過ごしじゃない？

女 そうかなあ。

男2 だって、エリザベスを悪く言うのを聞いたこともないし。それに、そんな目で見てるようにも見えない。

女 もしかしたら私のせいかな？

男1 どういうこと？

女 本人さえ気づいてないような無意識の気持ちまでキャッチしてるのかもしれない。あの人が隠してる気持ちまで。だって私、感受性が強いから。

男2 そんなに嫌ってるように思えないけどなあ。

男1 それにエリザベスは皆の人気者じゃない。嫌う奴なんかいないって。

女 自分が人のことを嫌いにならないようにすれば、自分が嫌われることもないと思ってたのに。

男1 大丈夫だよ。エリザベスは心が広いんだよ。だから誰も嫌わないよ。

男2 心配しすぎなだけだって。

男1 そうだよ。

女 嫌いとかマイナスの感情を持つちゃいけないとずっと思ってたの。だって嫌うってことは、

その人と仲良くなれないってことでしょう？ そうしたら寂しいのはやっぱり自分だもん。

男2 俺から聞いてみようか？ エリザベスのことどう思ってるか。

女 いいよ。

男2 けど、気になるんだろ？

女 だけど、そんなことしたらあの人に悪いよ。

男2 なんて？

女 だって、聞かれたら答えなきゃいけないでしょう。なんで嫌いなのか。どこが嫌いなのか。

けど答えたらそれが私に回ってくるじゃない。そう思うでしょう？ だったらそんなこと言えないよ。ってことは、嫌いじゃないって答えるしかないんだよ。本当は嫌いなのに、嘘つかなきゃいけないんだよ。かわいそうだよ。

男1 かわいそうじゃないだろ。かわいそうなのはエリザベスだよ。

女 だけど、あの人もかわいそう。自分の気持ちと逆のことを言うのってしんどいんだよ。それに、余計に私のことが嫌いって思いが強くなるよ。そんな嘘をつかせた私がつと憎いって。

男1 もしそうなくても、みんなエリザベスの味方だから。

女 そういう問題じゃないの。

女 a (女2) が登場。

女 a 私はここに宣言します。

いつのまにか、司会者 (ロバート) もいる。

司会者 a さんの登場です。 a さんが登場しました。

女 a 「私は、人を嫌いにならない人でいたいのです」。

女 b が登場。

女 b 私はここに宣言します。

司会者 b さんも登場です。対する b さんも登場しました。

女 b 「私は、あの人が嫌いです」。

司会者 あらあら、矛盾矛盾。早くも大きな矛盾が生じています。

女 a 私には矛盾なんかありません。

女 b そう私にもありません。

司会者 しかし、両者とも矛盾を認めようとしません。

女 a だって、私はいい事を言ってるんだもの。悪い事を認めることなんかできません。

女 b 私だって、思ったことを言ってるだけですよ。建前で隠すことなんかできるはずがない

でしょう？

司会者 戦いです。戦いです。両者とも一步も譲ろうとしません。おお、ぶつかりあっています。火花が散っています。取っ組みあいの喧嘩です。両者の間での妥協点はないのでしょうか？ なんとかしてこの争いを止める方法は？

女 a さつきから何、馬鹿なこと言ってるんです？ 私はずっとありません。

女 b 喧嘩したくないと言う人とは喧嘩することもできません。

司会者 そうだ、こんな選択肢があります。二つあります。

女 a・b 何？

司会者 一つ、「人を嫌いにならない人」という看板を下ろして、

女 a はああ？？？

司会者 「あの人を嫌い」ということを認めてしまおう。

女 b あら、それいいじゃない。たまにはうるさくてうっとうしい司会者でも、いいことを言うわね。

司会者 残酷なお言葉ありがとうございます。

女 a 私は、納得できないわ。今までどれだけ長い時間をかけてきたと思ってるの？ そこまでしてやっと「誰のことも嫌わない心の広い寛大な私」ができたのよ。今さらそんな簡単に看板を下ろせるわけがないでしょう。あの人のが嫌いだなんてことが人に知れたら、プライドが許さない。

女 b でも、嫌いなんでしょう？

女 a だから、あんたが嫌いじゃなくなればいいのよ。

司会者 二つ、「あの人のことを好きになる」

女 b なんですって？

司会者 好きになる。

女 b 一度聞けば充分よ。

女 a そうそう、そうしなさいよ。そうすれば、私はずっといい人でいられるのよ。

女 b 無理無理無理。だってよだって、

女 a 落ち着きなさいよ。

女 b 前から見ても後ろから見ても、上から見ても下から見ても、やっぱり好きじゃないのよ。

それをどうやって好きになれって言うわけ？

女 a 横からみたら？

女 b 一緒よ。

司会者 困りましたねえ。決裂です。両者歩み寄りを微塵も見せません。これは格闘必至です。

どちらかが死ぬまで続けられます。正に死闘です。死闘は至当です。避けられません。ああ、そうこう喋ってるうちに始まりました、始まりました。おお、醜いです。女同士の醜い争いです。いえ、醜い女の争いでした。失礼しました。醜い女が争っています。あ、早くも決着がついたようです。つきましたつきました。「あの人を嫌い」と宣言したbさんの負けです。bさん負けました。負けました。となると、どうなるのでしょうか？

女 a 当然の結果よ。

女 b 悔しい。

女 a あなたの論理が通るわけがないでしょう。

女 b 死んでも死に切れない。

司会者 bさんが動き始めました。負けたbさんがどこかに向かって歩いていきます。しかしそれはaさんの方向ではありません。おおっと、それはあの人です。bさんが嫌っていたあの人のところに行きました。

女 b (あの人に) 私は、あなたが嫌い。私はあなたが嫌い。あなたが嫌い。

あの人 私は、あなたが嫌い。あなたが嫌い。

女 a 勝てばいいの。私は自分の宣言を下ろさなくてよければ、なんだっていいわ。

女 b ドロドロドロ。(と、消える。消えてあの人を後ろに回る)

司会者 どうやら全てが終結を迎えたようです。めでたしめでたしです。

女を見つめるあの人。

女 ほら、やっぱり私嫌われている。

男1 そうか？ そんな風には見えないけどなあ。

男2 被害妄想だよ。

女 他の人には分らないように嫌っているの。私は嫌いじゃないのに。嫌いじゃないけど、どうせ嫌われているのなら、近寄らないようにしよう。嫌いになるわけじゃないの。ただ向こうが私を嫌ってるんだから近くに行かないようにするだけ。

あの人 どうやら私はエリザベスに嫌われているのね。嫌われるくらいなら、女 私は、人を嫌いになれないの。嫌われることはあるけど嫌うことはない。

女、その場にうづくまる。

女 「嫌いにはなれない」

SCENE・7

女1が歩いてくる。その向こうからある人物が歩いてくる。一本道。女とある人物は互いに相手の存在を意識しながら、だけれど自分の進んでいる先に向かって歩いている。女が左に避けようとすると、ちょうど同時にある人物も右に避ける。要するに、また互いの真向かいに相手がいる。女はそれを感じ、左を譲って右に避けようとする。するとまたしてもある人物は左に避け、真正面となる。このままではぶつかるのではないのか？と女は思っている。まだ二人の足は止まってはいいない。相手を探りながら、もう一度女は逆に身体を寄せて通り過ぎようとしたそのとき、ある人物も同じことをした。驚きながら止まることのできない二人。鼻と鼻と突き合わせる形になって始めて、二人は急激に歩みを止めた。止めざるを得なかった。ぶつかりそうになるのを寸前のところで押さえたようだ。沸きあがる感情。頭の頂点から流れ出すマグマ。噴火した。

女1 なんて、なんで邪魔するの。歩きたいだけなの、ただ歩きたいだけなのよ。なんで、なんでよ。ねえ、なんでよ。私にはただ歩くことも許されないの？ ただただ歩きたいだけなの。邪魔しないで。お願いだから邪魔しないでよ。お願い、お願い、お願い。お願いだから。

うづくまる女。上から見下ろすある人物（ロバート・メアリー・エリザベス）。

女1 あるけない もうあるけないよ いちどとまってしまったらあるくことができない だからだからとまらないようにがんばってきたのに さけようとしてたのに どうしたらいいのうごけない もう もう もう

ある人物 どうしたんですか？ （邪魔だなあ）

ある人物 大丈夫ですか？ （うっとおしいなあ）

ある人物 しっかりしてください。 （行ってもいいかなあ）

女1、突如笑い出す。

ある人物は、そのまま行き過ぎる。

SCENE・8

走っている女2と男2。二人の足は繋がっている。要するに二人三脚である。逆方向から、長い紐で片足が繋がった女3と男1がやってくる。

女2 忙しそうね。

男2 まあね。

女2 だから走って帰るの？

男2 そういうわけでもないけど。

女2 そう、

男2 健康中毒にかかっているわけじゃない。だから仕事でただよ、走るの。それ以外は普通に歩くさ。今だって、

女2 走ってない、って言うの？

男2 君が早く帰ろうとしているから合わせてるだけだ。

女2 私は、あなたに合わせるだけよ。おかしいね。

男2 おかしいな。

女2 これ以上、早く走ると酔いが回るわ。

男2 けど、電車に間に合わないよ。

女2 あなたは電車じゃないでしょう？

男2 いいって。

女2 何？

男2 駅まで送ってくよ。

女2 一人じゃ危ない？

男2 危なくはなさそうだけど。

女2 ここからなら、あなたの家が近い。

男2 まあな。

女2 歩きましょうよ。

男2 けど、終電だろ？

女2 泊まるからいいわ。

男2 泊まるって？

女2 気にしないで。走りたくないの。

男2 どこに？

女2 え？

男2 どこ？

男1 たまには出掛けたら？

女3 出掛けるって？

男1 ずっと家にいたら気が滅入るだろ。

女3 一緒に行ってくれるの？

男1 誰か誘ってほしい。

女3 え？

男1 一人旅がいいなら、それでもいいけど。

女3 ああ、

男1 何？

女3 旅行ね。

男1 何のことだと思ったの？

女3 いいわよ、行かない。

男1 仕事やめてから、ほとんど外に出てないんじゃないのか？

女3 買い物には行ってるわ、それに美容院、クリーニング屋、

男1 近場ばかりじゃないか。
女3 全て近所ですむんだもの。それに面倒だわ、電車に乗って出掛けるのなんて。
男1 葱やシャンプーばかりじゃなくて、帽子や服でも買ってこればいい。そうしたら旅行にも行きたい気分になるんじゃない？
女3 どこか行きたいところでもあるの？
男1 俺にはないけど。
女3 私にだってないもの。
男1 仕事が忙しくて、旅行どころじゃない。けど、お前にまで同じように窮屈な思いをさせるつもりはないし。
女3 だからいいの。私はあなたと一緒に居られたらそれでいいんだから。
男1 (笑) だからって、部屋の中までついてまわらなくてもいいだろう。
女3 え？
男1 なんか追い立てられてるみたいで嫌だよ。
女3 だって絡まっちゃうもの。
男1 何が？
女3 短ければいいけど、長ければ長いほど、どちらかが合わせないと気づかないうちに身動きがとれなくなってしまうことだってあるんだから。

女2 リズムを刻んでないと駄目なの。ドクドクって。
男2 リズム？
女2 そうしないと、合わなくなっちゃうわ。
男2 君から？
女2 え？
男2 それとも俺からってこと？
女2 二人ともが。一度合わなくなると、もう一度進みだすことは難しいの。
男2 大丈夫だよ。少し会わなかったからって、何も変わらないよ。それに君には君の生活があるだろう？
女2 生活のリズムのことじゃないのよ。
男2 じゃあ、
女2 鼓動。
男2 コドウ？
女2 あなたの方が早いわ。いいわよ、泊まっても。
男2、歩みを止める。女2は止めない。転ぶ女2。

男2 あ、
女2 なんで急に止めるのよ。
男2 お前もそう言ったんだろ。
女2 一人じゃないのよ。
男2 え？
女2 私だけの身体じゃないの。
男2 どういうこと？
女2 ドクドクとした鼓動が聞こえる。どちらかの鼓動が早くなると、つられてもう片方も早くなる。
男2 一人じゃないって、
女2 あなたもよ。
男2 ・・・
女2 あなたの身体もあなただけのものじゃないの。
男2 お前、

女2 そう。
男2 嘘だろ？
女2 嘘ついてどうなるの。
男2 本気かよ。
女2 これからはずっと一緒ね。
男2 ・・・・
女2 嫌そうね。困ってる。鼓動が早くなった。
男2 ・・・・突然そんな話されたら、誰だって。
女2 仕方ないわ。決めたんだから。
男2 決めたって？
女2 大丈夫よ。私があなたのリズムに合わせるから。さあ、行こう。

男1 長いよな。一日が長い。
女3 一日の時間は一緒よ。明日は休みなの？
男1 いや、事務所に行かなきゃいけない。
女3 そう、
男1 仕方がないだろ。
女3 家に一日いることがないのね。
男1 仕事なんだから。
女3 私の仕事はお留守番ね。
男1 だから、一度旅行にでも、
女3 違うの。
男1 仕事だっと思っていたんだったら、
女3 だから、違うんだって。
男1 じゃあ、
女3 この家の中から、世界を見ているの。世界が揺れている様をじっと見ている。私には関係のない芸能人のスキャンダルや、知り合いの知り合いの知り合いが亡くなった事故、そして、おじいちゃんかおばあちゃんの生きてた時代をめぐる争い、よくわからない条約の締結。今の私の世界は、こんな狭い家の中だけなのに、多くの知らない情報が流れ込んでくる。あなたが夜遅くに帰ってくる。仕事の忙しい毎日。けど知ってる。仕事と仕事の間にあなたが何をしているか、どこにいるか、

男1 え？
女3 どこにいてもわかる。
男1 言ってることの意味がわからない。
女3 どこに行ってもいいのよ、あなたは。私はここで見ているから。
男1 わかった。
女3 何？
男1 明日、仕事に行くのやめるよ。
女3 どうして？
男1 来週は、出張で家にいることができない。だからせめて明日なら、
女3 仕事でも仕事じゃなくてもいいのよ、家のことは気にしないで。
男1 一緒に出掛けよう。おいしいものでも食べにいこう。
女3 おいしいものなら、家でも食べれるわ。
男1 最近、二人で食事したことなかっただろ？
女3 朝ごはんは食べてるじゃない。
男1 食べてるのは俺だけで、お前は食べてないじゃないか。
女3 朝はお腹がすかないの。
男1 運動不足だからだよ。
女3 家の中を歩き回ってるわ。

男2 ちょっと待てよ。

女2 何？

男2 無理だ。

女2 え？

男2 そんなこと勝手に決められても。

女2 あなたが進まないよ、私も進めないの。

男2 そうだよ。こういうことは二人で決めるもんだよ。

女2 じゃあ、決まるまでこのままね。けど、間に合わないわよ。

男2 そうなのか？

女2 時間でしょう？

男2 わざとか、

女2 え、

男2 わざとだったのか、

女2 共犯でしょう？

男2 知ってたんだろ？

女2 終電近くまで飲んでたのはあなたも一緒よ。

男2、女2 ににじり寄る。バランスを崩して崩れる二人。

女2 離れることなんかできないわよ。どんなにあなたが私と離れたがっても。私はずっとあな

たに合わせてきた。これからもそう。面倒なことが嫌いだって言ったわよね。面倒なことはお

こしたくないんでしょう。だったら、

男2 静かにしろよ。

女2 一緒にいるしかないわ。

男2 喋るなって言ってるんだ。

女2 の首を絞めようとする男2。

女2 しめるなら、首じゃないわ。わかってないのね、やっぱり。

男1 疑ってるんだろ？

女3 何を？

男1 俺のこと。

女3 何？ 何かあるの？

男1 じゃあ、いいんだな。

女3 何なのよ。

男1 明日、仕事に行くことにする。

女3 いいも悪いもないでしょう、仕事に行くのをなんで止めることができるの？

男1 外で食事もしてくる。

女3 じゃあ、あなたの分は作らないわね。

男1 おいしいものを食べてくるよ。

女3 バランスが偏らないようにね。

男1 たぶん遅くなるよ、帰るの。

女3 深夜になるようだったら、静かに入ってきてね。私最近寝不足だから寝れるときには寝て

おきたいの。

男1 休みの日でも、ここにいる時間はほとんどないと思う。

女3 そうなの？

男1 それでも、お前はここにいるしかない。

女3 留守番していると、外の音に敏感になるの。うわさ話なんかには耳ダンボよ。こんな（耳を広げてみせる）になる。ここはうるさいわ。近所の人の声が大きい。話題には事欠かない。

男1 聞きたくないことは聞き流せばいい。

女3 そうしてる。

男1 それでいいなら、大丈夫だよ。

女3 わかってないわね。

男1 え？

男1と女3、絡まって動けない。

女3 私が動けないってことは、あなたも動けないってことなのよ。

SCENE・9

男と女を繋いでいた紐は解かれている。
震えている女2・3。それを見下ろしている男1・2。

女2・3 そばにいて、そばにいて、お願い。
男1・2 なに？
女2・3 たすけて。たすけてください。
男1・2 なんで？ なあ、なんで俺がそんなことしなきゃいけないの？
女2・3 ……つかんで…。掴んでほしい。せめて、せめて。せめてせめて、せめて私の足を掴んでよ。そうしないと、そうしないとどこかに、どこかに飛んでいっちゃう。とんでいっちゃうよう。とんでいっちゃうから。とんでいっちゃうから。今だけでいい。今だけでいいの。今だけでいいから。今だけで。

男1・2 俺がお前の足を掴んだところで、トブモノトブダロ。お前はただ気が狂いたいんだろ？ もしくは狂った振りをしたいだけなんだろ？ つきあえていう方がおかしいよ。

女2・3 じゃあ……。
男1・2 （笑）またお願いかよ。まだお願いするっていうのか。
女2・3 お願い。
男1・2 聞きたくない。聞きたくなんかないね。
女2・3 ……お願いだから、
男1・2 聞きたくないって言ってるだろ。
女2・3 コロシテ
男1・2 ……。
女2・3 最後。
男1・2 ……は？
女2・3 これ以上何も言わない。言わないから。……………コロシテ
男1・2 ……嫌だ。

違う空間に現れていた女1。

女1 加害者ぶってるあなたの口振り、素振りが大嫌い。

男1・2 お前なあ、

女1 だけど、被害者ぶってる、被害者になりたいと思ってる、被害者被害者言ってる自分とは
つと嫌。死んでほしい、死んでほしい願わくば。

男1・2 俺どうなるわけ？ お前を殺して俺はどうしろって言うんだよ。

女1 理由がないものが怖いよ。だから皆たいがい理由付けしようとする。原因を探りたいん
でしょ？ 知ってるんだから 知ってるんだから 知ってるんだから・・・ だけど、

男1・2 自分が何言ってるのかわかってるのか？

女1 無駄よ。無駄だから。

男1・2 俺はお前の道連れなんかになりたくない。

女2・3 わかった。コロシテくれないのなら、ワタシがコロス。ワタシがアナタをコロス。

女2・3 は、男の首に紐をかける。

SCENE・10

女1・2・3 才能がないから、物語を求めるの。あなたにはそれが必要なかった。それが私に
は憎い。あなたは物語の中から忽然と姿を消した。残された登場人物はあなたがなくなった
訳を語らなければならなくなった。みんなが勝手にあなたのことを語る度に、あなたの像は崩
壊していく。やはり物語は終わらない。あなたは自分の捨てた物語に未練などない。切れ目を
嘘のハギレで取り繕ってみたけれど、それはマクラカバーにもなりえない。

女2・3 は姿を消す。

女1 あなたをずっと探していました。

男 そうでしたか。

男（男1・2）は女1に顔を見せることはない。

女1 約束しましたよね。

男 そうかもしれません。

女1 そんな無責任な言い方をしないでください。

男 あれは物語の中においてです。二人の物語。

女1 待ちくたびれたんです。

男 待ち続けることはつらいことです。

女1 なぜ、戻ってきてくれなかったんですか？

男 あなたも待ち続けるのをやめてるじゃないですか。

女1 待っていました。だからここまで来たのです。

男 それは追ってきたんです。

女1 そうです。

男 待つこととは違う。

女1 来ないあなたを待ち続けろと？ ずっとその場で待っていてほしかったんですか？

男 いいえ。

女1 そうですよ。最初は待つっていると約束した私がいることが、あなたにとって、あの時のあなたにとって大切な支えになったと思っていました。しかし何年間か待ち続けているうちに、そうではないということに気がついたんです。

男 何に？

女1 あなたは、戻ってほこない。そして待つている私のことを忘れていると。忘れられるのだけは許せなかった。ここであなたのことを考えている私のことを忘れるなんて、男 では、手紙でも書けばよかったのですか？ それを責めているのですか？ 待つてほしいと私は言ったことはありません。

女1 けど、待つてゐるねと言ったら、あなたはわかったと言いました。わかったと。

男 これだけ長い間、待つてゐると思いませんでした。

女1 自分でもびっくりしています。けど、だからこそ、ここでこうやってあなたに会えたのだと思つています。

男 どうですか？

女1 え？

男 今の私を見て、何を思いますか？

女1

男 これが、あなたのずっと待つていた人物の成れの果ての姿です。がっかりしたでしょう。

女1 思い描いていたあなたとは違うけれど、あなたには変わりがないから。

男 作り変えるわけですね。自分の物語の中の登場人物を。付加要素を足して、違う人物に。

女1 待つということは、逃げることよりも楽だと思つていたんです。けれど、そうではなかった。そう、楽なことではなかったんです。待つことが私の全てになったんです。

男 待つことと逃げることは、どちらが罪なんでしょうね。

女1 どういう意味ですか？

男 私は逃げた。あなたの物語から。あなたは待った。そして物語を続行した。

女1 だから？

男 さっきあなたは、待つことは逃げることよりも楽ではないと言った。それは待ったあなたの視点からの物語です。待つ人はいつも待たれている人のことを考えない。待つという行動が受身であるということを知っているから、被害者なのです。

女1 待たれるから逃げたとも言わんのですか？

男 いいえ、そうではありません。

女1 じゃあ、

男 そんなことを言うほど、自分の立場を知らないつもりはありません。ただ、待たれるということを知つて出て行くのも、つらいということです。

女1 負担だったと言いたいの？

男 待つことは、待たれている人がそのことを知ったときに、形を変えます。全面的に被害者ではなくります。

女1 逃げだした人の言葉とは思えない。

男 そうです。あなたから見たら卑怯な言葉でしょう。しかし、あなたには、待つと言いながら、私を捨てることもできたのです。新しい登場人物を物語の中に登場させることもできたんです。けれど、あなたはそれをしなかった。それは、逃げた私が新しい物語をつくることと同じことです。しかし、待たれているものは、待つ相手がいる以上、その物語から抜け出すことはできません。

女1 あなたは、多くの物語を持ちすぎていました。だから捨てるしかなかった。幾つもの物語を追求めすぎたんです。終わりのある物語の中にはあったんでしょうが、終わりのないものもあります。だから、あなたはセミナーを開いて、新しい物語の作り方を示唆しようとしたんでしょう。けど、それは新しい物語の作り方なんかじゃない。角度を変えて同じ物語を見ることだったんです。

メアリー・エリザベス・ロバートが走りこんでくる。

メアリー すみません。
エリザベス ちょっとこっちに来てください。
ロバート お願います。
エリザベス 大変なことに。
メアリー とにかくこちらに。
ロバート 何が何だかわからないんです。何がどうなったのか。
男 どうしたんです？
メアリー とにかく、
エリザベス 早くしてください。
ロバート 人が死んでいるんです。
男 え？
女1 そんなはずありません。
エリザベス 嘘じゃありません。
メアリー 事実なんです。
ロバート 見ればわかります。

男は、メアリー・エリザベス・ロバートについていく。

女1 なんて？ そんなはずがない……

SCENE・11

女2が倒れている。

ロバート ワークの途中だったんです。何が起こったのか見ている僕たちにはわかりませんでした。

エリザベス 二人が重なるように同時に倒れて、

メアリー そうしたら死んでいたんです。

女3 どうしてヘレンが死ななきゃいけないの？

男2 僕が殺しました。

女1 ……え？

男1 ……サミュエル？

男2 僕が殺したんです。

メアリー どうして？

ロバート そんな、

エリザベス どうしよう、

女3 あなたが？

男2 はい。

メアリー これからどうなるの？

ロバート 人が死んでるってことは、

エリザベス だけど、

女3 本当にあなたがやったの？

男2 そうです。

メアリー なんてそんなことに。

男2 首を絞めたんです。

女3 あなたがヘレンを殺したのね？

男2 殺してと頼まれたんです。
エリザベス どういうこと？

男2 頼まれたから殺した。ただそれだけです。

ロバート ただそれだけって。

メアリー そんな簡単に。

男2 邪魔だった。あいつの存在が邪魔だったんです。

男1 サミュエル、落ち着くんだ。

ロバート そうだ、僕たちも冷静になろう。これはワークなんだよ。今までののは全て役割を演じてきただけだ。演技の中で人が死ぬわけがないんだ。

メアリー そうよ、落ち着きましょう。わかった、もしかしたら死んでいるフリをしているだけなんじゃない。これも演技の中なのよ。

エリザベス そうね、メアリーの言うとおりだわ。サミュエルを相手役にして、ワークを進めていく中でそういう展開しなかったってことね。

女3 生きているように見えますか？

エリザベス なんでヘレンは死にたがったの？

メアリー もう少し続ければわかるはずよ。

ロバート そうか。俺たちが今ワークを中断させて邪魔しているんだ。

メアリー なんで死んだのか、なぜ殺したのか、それがわかればヘレンは生き返るはずよ。

ロバート これまでだってそうだったんだ。

女3 あなたは、ヘレンとどんな関係だったんですか？

男2 共犯でした、あいつと俺は。俺はあいつに他に付き合っている奴がいることを知っていた。

あいつも俺が別に付き合っている女がいることを知っていた。お互いに相手の状況を知っていたからこそ、軽く付き合えていたんだ。それなのにあいつは俺を拘束しようとした。いつの間にか共犯の関係を脅迫のようになんて使った。個人の生活の領域にまで踏み込んでくるようになったんだ。「もう会わないようにしましょう」と言うと、あいつは俺を殺そうとした。だから俺もあいつの首を絞めたんだ。そしたらあいつは殺してほしいと。

女3 だから殺したの？

男2 それ以外、どうすることもできなかったんだ。

メアリー けど、それはワークの中の話でしょう。ワークの中でそうなったということは、現実にはそうならないようにすればいいということよ。

男2 これは現実の再現なんでしょう。仮想の演技ではなく。

ロバート え？

女1 電気が消えたわ。

照明が暗くなる。

別の場所にエリザベスが倒れている。

女2は、それまで倒れていた場所に立っている。

女2 エリザベスは言いました。

女3 ヘレン？

メアリー エリザベスが、

男1 エリザベスが死んでいる。

ロバート 一体何がどうなって、

女2 自分の中の葛藤に耐えられない。このままでは自分が壊れてしまうと。ワークをしながら助けを求めています。人に求められる自分ばかりを演じて、自分がわからなくなつたと。感情を殺し続けていたら、いつか自分がなくなってしまうと言いました。そして殺してほしいと頼んだのです。

メアリー 誰に？

女2 サミュエルに。

ロバート エリザベスを殺したのはサミュエルなんですか？

男2 僕はエリザベスを殺した覚えはない。ヘレンを殺したんだ。
女2 けど、私はここにいるわよ。
ロバート いやあ、エリザベスは、
メアリー 誰に殺されたの？

女2 サミュエルに殺してほしいと頼みましたが、彼はエリザベスを殺しませんでした。エリザベスはただ近くにいたから、サミュエルに頼んだだけです。頼まれたからって誰でも殺せる人はいないはずよ。

女3 どういうこと？

男1 サミュエルじゃないんだろ？

女2 誰に殺されたのかは、私も見ていないから知りません。

男2 俺じゃないんだな。

女2 あなたはエリザベスを殺してないわ。だって、私と一緒にいたじゃない。

男1 そうだ、サミュエルはヘレンといたんだ。そしてヘレンは生きている。

男2 じゃあ、俺は誰も殺していないのか？

女1 エリザベスが死んだのね。

女3 エリザベスが、

女2 死んだ。

男1 死んだのは、

男2 エリザベス。

メアリー エリザベスが。

ロバート エリザベスが。

照明が暗くなる。

男2 おい！

ロバート まだだ。

女2 死んでいる。

メアリー 誰？ 誰が死んでるの？

男1 エレンだ。

女1 エレン？

男2 エレンが死んでいる。

ロバート 今度はエレンか。

メアリー エレンが死んでるって、まさか。

女2 死んだのはエリザベスだけじゃなかったの？

メアリー 二人が殺されたってこと？ それとも三人？

ロバート ヘレンは生きているんだ。だから二人じゃないのか。

メアリー でも、

男2 もしかして、

女2 なに？

ロバート もしかしてって、

男2 お前が殺したのか？

メアリー え？

女2 どういうこと？

男2 そうなのか？

男1・・・どうなんだろう。そうなるのかもしれない。

メアリー どうして？

ロバート どうなってるんだ？

女2 あなたが殺したの？

男1 けど、直接手をくだしたわけじゃない。あいつが死ぬのを助けなかったただけだ。
メアリー 死んだって、いつエレンは死んだの？

女2 あなたがエレンを殺したのね。

男1 噂に翻弄されておかしくなっていくあいつの様子を知っていながら、何もなかった。ずっと家の中に閉じこもって、自分だけの世界をつくっていくあいつに、俺は恐怖を感じていたんだ。だんだん家にいるのが嫌になっていき、俺は別の場所に居場所を見つけた。あいつは柔らかな縄で締め上げるように、俺の生活を窒息させようとした。けどそれは俺を窒息させるだけでなく、あいつ本人も窒息させることだった。不眠症だったあいつは、医者から睡眠薬を大量にもらっていた。俺が知り合いの家から深夜に帰宅すると、眠っていた。普段ならすぐに起きてくるのに、その時は起きてくることはなかった。だからすぐに分かった。けれど、俺はそのまま眠ったんです。眠ることができたんです。

メアリー それは嘘よ。

男1 嘘じゃない。

ロバート けど、それじゃあワークの途中ではないじゃないですか。

男1 なんのことですか？

ロバート え？

男1 ここにまで、エレンが追いかけてきているとは知りませんでした。あいつはずっと家の中で眠っているものと思ったのに。

女2 いつ殺したの？

男1 いつでしょう、さっきなのか。ここに来る前なのか。ただエレンが死んでいるとすれば、殺したのは俺でしかあり得ない。

ロバート 何かがおかしい。ワークの中では二人は一緒に暮らしていた。けどそれはワークの中での話だ。エレンの過去であって、現在ではないはずなんだ。

メアリー けど、エリザベスは死んだ。ヘレンは生き返ったけどエリザベスは生き返っていない。

どういうこと？ 何がどうなってるの？

ロバート また誰かが死ぬってことか？ そしてエレンは生き返るってことか？

女2 けど、今ここで倒れているのはエレンよ。

メアリー 嫌だ。今度は誰なの？

男1 エレンを殺すとしたら俺なんだ。

女1 電気が消えるわ。

照明が暗くなる。

女3 は、それまで倒れていた場所に立っている。

男2 それは違う。エレンはここにいます。

男1 え？

女3 あなたは人を殺せるような人じゃない。誰も死んでなんかいらないわ。ただメアリーが出て行っただけ。

女2 メアリー？

ロバート けど、メアリーはさっきまでここに、

女3 メアリーは気がついたのよ。ようやく自分が忘れてた現実には、自分が母親であることに。自分を捨てた母親とのトラウマを乗り越えようとしていたメアリーは、乗り越えなければならぬのは、自分と母親の関係ではなく、自分と娘の関係だったと知ったんです。関係が断ち切れなくなったメアリーは、母親という役割を捨てるしかなかった。そうすれば、たとえそれが自分の母親がしたことと同じ行動であろうとも、関係を変えることにはなる。けど、それには何の意味もない。だってただ子供であろうとするだけの話ですもの。だから出て行った。

ロバート メアリーはどこに行ったんだ？

女3 そんなこと知らない。出て行くとしか言っていないもの。

男1 エレンを置いて出て行ったのは俺だ。

女3 けど、私はここにいます。

男1 じゃあ、俺は誰を置いてきたんだ？

女2 出て行ったのはメアリーなんだから、メアリーじゃないかしら。

男1 メアリー？
女2 メアリーは母親であり、母親に置き去りにされた子供よ。

男2 誰かがいる。誰かがいるぞ。倒れている。

ロバート え？

女2 まだ誰かいるの？

ロバート メアリーだ。

男2 メアリーは死んでいたのか？

ロバート 出て行っただんじやないのか。だつてさっきそう、

女3 出て行つたのよ。けど、ここにいる。死体になってここにいる。ということは殺されたのよ。

ロバート 誰に？

男1 俺はエレンではなくメアリーを殺したのか？

男2 この中の誰かが殺したんだ。

女1 メアリーは死んでいたのね。

女2 出て行つたのではなく、

男1 死んでいた。

男2 殺されたんだ、

女3 誰かに。

ロバート メアリーは。

照明が暗くなる。

ロバートが倒れている。

女1 もう一人、死んでるみたい。

男2 ロバートか？

女2 ほんとう、死んでいる。

女3 死んでしまったのね。

女1 ロバートは死んだわ。

男1 殺されたんだ。

男2 誰かが殺したんだ。

女3 どうして、ロバートは死んだの？

男1 だから殺されたんだ。

女2 殺した人があるはずよ。

男2 生きるのを放棄したんだろ。

女3 どういうこと？

男2 選ばなかったんだよ、生きるか死ぬか。殺すか殺されるか。

女1 さあ、続けましょう。

男1 何を？

女1 物語をよ。

男2 何の物語だ？

女2 ゲームね、これは。

女3 それともまだワークの続き？

女1 そんなことどっちだっていいわ。やっと5人になったんだから。そしてあと一人いるはずよ。

男1 あと一人？

男2 まだ誰かがいるのか？

女2 殺された人があるの？

女3 それとも殺した人があるの？

男1 言ってる意味がわからない。

男2 ここには5人しかいないじゃないか。

女3 もしかして、また誰かが生き返るとでもいうの？ ヘレンみたいに。
 女2 エレンみたいに誰かが生き返るの？
 女1 エリザベスとメアリーとロバートが、生き返ることはないわ。
 男1 どうして？
 男2 どうしてそんなことが言えるんだ？
 女1 だって、あの人たちは私が昔に出会った人だもの。
 女2 え？
 女3 昔に出会った？
 男2 ああ、三人を知っていたのか？
 女1 昔、セミナーで一緒だったの。ここにいるはずのもう一人が作ったセミナーに。彼はそのセミナーで人を殺した。一人目は首吊り自殺、二人目は睡眠薬の大量摂取、三人目は事故死。二人は自殺で、一人は交通事故だったけれど、彼がセミナーの中で殺したも同然よ。新しい物語を手に入れるためだといって、彼らを追い込んだ。
 男2 それが、あの3人だったっていうのか？
 女1 私はそこではジェニーと呼ばれていた。三人はエリザベス、メアリー、ロバートと呼ばれていたわ。本名は知らない。
 男1 じゃあ、3人は、
 女1 ここがどこだと思ってるの？ ここは今はセミナーの施設なんかじゃない。
 男2 違う。
 女1 何が違うの？
 男2 ここは、ここは偏見やトラウマをなくすためのセミナーの場だ。
 女2 まだそんなことに固執してるの？
 男2 え？
 女3 ここは私たちの家でしょう？
 男1 家？
 女3 ここは私とあなたが暮らす家よ。
 女2 そう、ここはあなたの家。
 男1 俺は、あいつを置いて家を出てここに来たんだ。ここでもう一度全てをやり直すために。
 男2 あいつを埋めた。自分の家にあいつを埋めて、俺はここに来た。そう、シルヴェスターと二人で。
 男1 そうだ。サミュエルと二人でここに来たんだ。
 女1 いいえ、それはあなたたちが作った物語よ。属性を持ったままのあなたたちが。
 女2 サミュエルと呼ばれていたのね？
 女3 シルヴェスターと呼ばれていたのね？
 女2 けど、サミュエルはここにはいない。
 女3 シルヴェスターもここにはいない。
 女2 だって、
 女3 知らなかった？
 女2 私たちはずっと一緒だって言ったでしょう。
 女3 離れることはできないって。
 女2 あなたがコロシテくれないのなら、
 女3 コロスって言ったでしょう。
 女2 コロスって言ったでしょう。
 女3 あなたがコロシテくれないのなら、
 男1 まさか、
 男2 もしかして、
 女1 彼はどこ？ この物語を作った彼はどこなの？ このセミナーの創始者だという彼はどこにいるの？ ここにいるんでしょう。ここにいるはずなの。
 男1 そういうことか、
 男2 ようやくわかった。

女2 どうしたの？
女3 ここがどこだかわかった？
女2 自分のことがわかったの？
男1・2 ああ、
女2・3 じゃあ、やっと、
男1・2 電気が消えた。
女1 え？

照明が暗くなる。
いない誰かを囲んでいる五人。

男1 これが彼だ。
男2 そう、これが探していた彼だ。
女2 死んでるの？
女3 この人も死んでるの？
男1 殺したんだ。
男2 俺らが殺した。
男1 だから、ここにいることができた。
男2 これはあんたの物語であり、彼の物語でもあったからな。ちよつとそれを拝借したんだよ。
男1 そうすれば、俺らの居場所は確保されるだろ？
女2 じゃあ、
女3 私たちは、
男1 ここにはいない。
男2 俺はヘレンとはいらない。
男1 エレンと一緒に生活はもうない。
男2 そこに俺はいないんだ。
男1 だって、ここにいるんだから。

メアリー・エリザベス・ロバートが登場してくる。

メアリー どこですか？
ロバート どこにいるのです？
エリザベス ワークが終わりました。
メアリー 出てきてください。
ロバート シェアアの時間です。
エリザベス リーダーの話をみんな待っています。
メアリー 自分のトラウマを語りました。
ロバート 偏見を捨て去りました。
エリザベス 空っぽになったのです。
メアリー・ロバート・エリザベス だから、新しい物語をください。新しい物語を。次の物語をください。

女1 終わらせに来ました。考えを捨てにきたのです。考えは実際には存在しないものです。知性や空想など、自分の頭の中で作り上げたものなのです。全ての考えは、過去と未来から成り立っています。過去も未来も「今、ここ」には存在しません。

女2 あなたは、私を殺したと言うけれど、私はあなたに殺されてはいません。
男2 お前は俺を殺したと言いたいんだろう。だけどお前に殺されていない。
女3 あなたは、私と離れたいと言うけれど、私はあなたと離れません。
男1 お前は俺が離れていくことはできないと言いたいんだろう。だけどお前は近くにはいない。

女2・3 あなたは加害者になりたがっているけれど、加害者は私なのよ。
男1・2 お前は自分を被害者だと思っているんだろうけど、被害者は俺だ。

女1 また物語が角度を変えだした。終わらないわ。角度を変えてしまうと終わりがなくなるの。
どんなに終わらせたい物語でも進んでしまう。

ロバート 姉さんが僕を作り上げたと思っていただけ、僕が姉さんを作り上げてたということですか？
メアリー お母さんは私を捨てたというけれど、本当に捨てたのは私だったということですね？
エリザベス あの人に嫌われていると思っていただけ、それは私が嫌っていたからだっただけでしょう？

女1 終わらない。私には関係のない芸能人のスキャンダル、知り合いの知り合いの知り合いが亡くなった事故、おじいちゃんかおばあちゃんの生きていた時代をめぐる争い、よくわからない条約が締結されるかどうか。私の中にもう一つの物語が生まれそうなのに、全てが角度を変えて回ってしまう。物語を終わらせるのは、あなたじゃない。周りじゃない。だから私はあなたを探しにきたのに。物語を手放したいの。邪魔しないで、邪魔しないでよ。

女2・3 あなたを殺したのは私よ。
男1・2 お前を殺したのは俺だ。

SCENE・12

ある場所に訪れた二人の男。

男1 すみません。
男2 すみません。
男1 ここでいいでしょうか？
男2 ここでいいでしょうか？

動くことのなかった女2・3が、体勢を少しずつ変えだす。男たちの声に合わせて。しかし、女1だけは固まったまま。

女2 誰？
女3 誰？
男1 入ってもいいですか？
男2 入ってもいいですか？
女3 聞いている。
女2 聞いている。
男1 すみません。
男2 すみません。
女2 謝っている。
女3 謝っている。
男1 入ってもいいでしょうか？
男2 入ってもいいでしょうか？
女3 どうする？

女2 どうする？

男1 すみません。

男2 すみません。

女2 謝りながら入ってきた。

女3 謝りながら入ってきた。

男1 お邪魔します。

男2 お邪魔します。

女3 お邪魔されるようね。

女2 お邪魔されるようね。

男1 誰かいませんか？

男2 誰かいませんか？

女2 お邪魔されたみたい。

女3 お邪魔されたみたい。

男1・2 誰ですか？ あなたたちは誰ですか？

女1・2・3 私たちは姉妹ではない三人姉妹、姉妹ではない。私たちは同じ場にいる三人姉妹。

私たちは姉妹ではない三人姉妹、なぜなら私たちには同じ母親がいなかったし同じ父親がいなかったから、だけど私たちはみんな三人ともここにいるのだから私たちは姉妹ではない三人姉妹。

男1・2 ぼくらは兄弟である二兄弟、ぼくらは同じ父親がいて同じ母親がいて、二人ともここで元気でいるからぼくらは全くそこではない場所にいる。僕らは正しくもないが間違ったこともしない。そんな種類の兄弟だ、ぼくたちは。

女1 そして、みんな自分たちが何であるかわかったから自分たちお互いがなにであるかがはっきりわかったのだから、私たちは何をするのか？

男1 ぼくらはそれについて何をするのか。

女1 いえ、それについて何をするかではないそれについては何もすることがない、私たちは姉妹ではない三人姉妹で、私たち三人はここにいてあなたたちはそうではなくて、それについては何をすることもしないの。

男2 思いついた、いい思いつきだ、すばらしい思いつきだ、芝居をやろう、殺人の芝居を。

男1 そうだ、それがいい、じわじわと精神的に追い詰めていく芝居にしよう。自分の考えに追いつめられてしまうような。

女1・2・3 ああ、いいわ、やりましょう。

ゆっくりと暗転。

おしまい。

引用…ガートルード・スタイン「姉妹ではない三人姉妹」の台詞の一部を、3ページと34ページの一部に引用しています。